

遠隔授業不適切学習行動低減のための心理要因分析の試み

An attempt to analyze psychological factors to reduce inappropriate learning behavior in distance learning

岩屋 裕美^{*1}, 白澤 秀剛^{*2}
Hiroimi IWAYA^{*1}, Hidetaka SHIRASAWA^{*2}

^{*1}川崎市立看護大学

^{*1} Kawasaki City College of Nursing

^{*2} 東海大学

^{*2} Tokai University

Email: iwaya-h@kawasaki-nursing-c.ac.jp

あらまし：遠隔授業は今後も授業形態の一つとして継続的に実施されていくことが予想される。一方、遠隔授業の仕組みを逆手に取った不適切な学習行動を行っている学生が一定数存在していることが著者らの過去の調査で明らかになっている。本研究では、不適切学習行動がどのような心理要因と関連していて、どのような介入をすれば遠隔授業不適切学習行動を低減できるかについて分析を試みた。専門、動機づけ及び他者軽視による重回帰分析を行ったが、これらだけでは遠隔授業不適切学習行動頻度を十分に説明できないことがわかった。しかしながら、一部の遠隔授業不適切学習行動は対面授業の学習行動と同様に内発的動機づけに影響を受けていることを示唆する結果を得た。

キーワード：不適切学習行動、学習動機づけ、遠隔授業

1. はじめに

遠隔授業はコロナ禍での緊急措置として多くの大学で実施されたものであるが、文科省周知文にも記載があるように面接授業の一部として遠隔授業を取り入れることが可能となったため⁽¹⁾、今後も多くの大学の授業において継続されていくことが予想される。一方、著者らのこれまでの調査によって、遠隔授業において不適切な学習行動を行うのは少数の学生の例外的な行動ではなく、行動の種類によっては半数以上の学生がある程度の頻度で行っているような不適切学習行動が存在することが明らかになっている⁽²⁾。併せて、不適切学習行動を行う群と行わない群との間で学習動機づけに差が生じていることが明らかになっている⁽³⁾。

本研究では、不適切学習行動を低減させる為にどのような介入方法が必要なのかを、心理要因の面からの分析を行った。心理要因には、学習動機づけに加え、援助要請行動に影響していると思われる他者軽視⁽⁴⁾を加えて分析を行った。

2. 研究方法

調査は2021年度にA大学の2施設及びB短大にて実施した。2施設は学部学科が異なるため、実質的には3大学での調査と同等である。

2.1 調査方法

質問紙調査はWebフォームから実施し、QRコード及びURLを提示して回答を依頼した。回答欄末尾に「研究利用拒否」欄を設け、チェックの入った回答については分析対象から除外した。有効回答415件を分析対象とした。

2.2 調査内容

遠隔授業における不適切学習行動は、遠隔授業用主体的学習分類尺度⁽²⁾46項目のうち、11項目を使用した(表1)。「ほとんどしない(10%以下)」から「いつもする(90%以上)」までの5件法で回答させた。心理要因の学習動機づけの測定においては、岡田ら⁽⁵⁾の大学生用学習動機づけ尺度を用いた。この尺度は「外発」「取り入れ」「同一化」「内発」の4つの下位尺度34問から構成され、5件法で回答させた。他者軽視は、速水⁽⁶⁾の仮想的有能感尺度10項目を用いて、5件法で回答させた。

表1 遠隔授業不適切行動質問項目

遠隔授業不適切学習行動	
Q08	体調不良や特別な事情がなくても、単位認定に影響がない範囲で授業を欠席する
Q27	ライブ授業にアクセスはしているが視聴していない(寝る・離席するなど)
Q28	ライブ授業にアクセスはしているが、その授業とは関係のない作業をしている(別の授業の課題・ネット閲覧・スマホ操作、移動中など)
Q29	オンデマンド動画の再生はするが、視聴はしない(寝る・離席するなど)
Q30	オンデマンド動画の再生をしながら、その授業とは関係のない作業をしている(別の授業の課題・ネット閲覧・スマホ操作、移動中など)
Q32	ライブ授業では冒頭だけアクセスして途中で退室する
Q34	課題内容がほぼ空欄でも提出する
Q35	重要語句や答えだけを丸暗記する
Q39	課題実施にライブ授業録画やオンデマンド動画の視聴が必要であっても、見ずに課題を実施する
Q40	理解できない授業は途中で視聴をやめる
Q42	課題やレポートは友人の解答を写したり、少し改変したりして提出する

2.3 分析方法

心理的要因と不適切学習行動との関連を検討するため、学習動機づけ、他者軽視を説明変数、不適切学習行動を目的変数とする重回帰分析(強制投入法)を行った。対象者は専攻している専門分野が異なるため、専門を区別する制御変数を投入した。なお、動機づけの下位尺度間には連続性があり関連が高いため、専門分野の違いを示す「専門」を制御変数とした偏相関分析および、説明変数間の VIF (Variance Inflation Factor) 値から多重共線性を確認した。

本調査にあたっては研究者所属の倫理委員会(承認番号 21032)の承認を得ている。

3. 結果

偏相関分析の結果、説明変数間の偏相関係数は、最も高い値でも $r = .483$ (内発と同一化との間)であり、VIF 値は全変数 1.8 以下で多重共線性を疑う値は算出されなかった。

不適切学習行動に対して、主に内発が有意な負の関連を認め、Q35, Q39, Q40 では、外発が有意な正の関連を示した。Q8, Q27, Q32 では、他者軽視が有意な正の関連を示した。(表 2)。

表 2 不適切学習行動を目的変数とした重回帰分析

	Q8 β	Q27 β	Q28 β	Q29 β
専門	-.086	.162 **	.148 **	.120 *
動機づけ				
内発	-.057	.131 *	-.197 ***	-.200 ***
同一化	-.092	.113	-.117	-.033
取り入れ	-.011	.014	.081	-.006
外発	.083	.064	.046	.081
他者軽視	.108 *	.113 *	.038	.048
R ²	.065	.087	.104	.079
調整済みR ²	.052 ***	.073 ***	.090 ***	.066 ***

	Q30 β	Q32 β	Q34 β	Q35 β
専門	.041	.008	-.045	.081
動機づけ				
内発	-.269 ***	.111	-.114 *	.224 ***
同一化	-.068	.013	-.032	.132 *
取り入れ	.085	-.112	-.073	.124 *
外発	.028	.107	.042	.115 *
他者軽視	-.017	.134 *	.102	.018
R ²	.102	.060	.049	.136
調整済みR ²	.088 ***	.046 ***	.035 **	.123 ***

注. 強制投入法、 β は標準偏回帰係数。

注. 専門は、0 = 看護系以外、1 = 看護系。

	Q39 β	Q40 β	Q42 β
専門	.067	.097	.038
動機づけ			
内発	.084	-.144 *	-.179 **
同一化	.073	-.090	-.081
取り入れ	.074	-.072	-.035
外発	.220 ***	.156 **	.045
他者軽視	.082	.062	.085
R ²	.094	.093	.075
調整済みR ²	.080 ***	.079 ***	.061 ***

4. 考察

今回の分析結果では、決定係数が小さく、専門、動機づけ、他者軽視だけでは不適切学習行動の高低を十分に説明できていない。決定係数が低い要因としては、不適切学習行動の分散が小さいことが挙げられる。従って、R² が 0.1 を超えているものについてのみ、動機づけや他者軽視の影響の有無について議論する。

Q28 や Q30 はライブ授業やオンデマンド授業にアクセスはしているが他のことをしている場合で、いずれも内発との偏相関係数が負で有意である。授業に集中させるには内発的動機づけが重要であるという対面授業と同様の結果といえる。Q35 の重要語句だけ暗記する行為は対面授業でも見られる行動であり、内発や取り入れが高いとこのような行動はせず、取り入れや外発が高いとこのような行動の頻度が増えることが示されている。

これらのことから、遠隔授業においては内発的動機づけを対面以上に高めることで不適切学習の抑止につながることを示唆される結果を得た。教員との信頼関係が構築できず、遠隔授業の有効性に不満を持つことが不適切学習を誘発しているのではとの仮説で他者軽視を分析に含めたが、今回の解析からは影響がまったくないとは言えないが、不適切学習行動を誘発している様子は見られなかった。

参考文献

- (1) 文部科学省: “大学等における遠隔授業の取扱いについて(周知)”, 3 文科高, 第 9 号 (2021)
- (2) 白澤秀剛, 岩屋裕美, 結城健太郎: “学修行動頻度を用いた遠隔授業時の主体的学修分類尺度の試み”, 第 46 回教育システム情報学会全国大会論文集, pp.79-80 (2021)
- (3) 白澤秀剛, 岩屋裕美: “遠隔授業不適切学習行動と学習動機づけとの関係分析”, 教育システム情報学会 2021 年度特集論文研究会論文集, pp.29-33 (2022)
- (4) 白澤秀剛: “遠隔授業履修者支援を目的とした主体的学習と有能感との関係分析”, 教育システム情報学会誌, Vol.39, No.2, pp.299-302 (2022)
- (5) 岡田涼, 中谷素之: “動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響 -自己決定理論の枠組みから-”, 教育心理学研究, Vol.54, No. 1, pp.1-11 (2006)
- (6) 廣瀬泰幸: “新卒採用基準 面接官はここを見ている”, 東洋経済新報社, pp.58-71 (2015)